
私に斬られたいのですか？

曇色一鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私に斬られたいのですか？

【Nコード】

N9150Y

【作者名】

曇色一鉄

【あらすじ】

全生徒が武器を持っている学校に入学した一人の少女の物語

序章

ここにちよつと特殊な学校があつた。

その学校の名は、武器技術向上高等学校。通称武技高校。

この学校は自分が得意な武器を登録し、持ち歩くことを許可されている。

そして授業の一環として、技術を高める授業や、放課後に特別授業として殺し屋からの手伝いの依頼や、殺人依頼等を受ける授業もある。もちろん特別授業の成績は単位に加算される。

しかも、学校内であれば、教師の立ち会いであれば決闘をすることも許可されている。

これはそんな学校に今日入学する一人の少女の物語

入学式に持って行くのですか？

桜がほぼ満開になりそうな四月の始めごろ。私、切宮香は入学式に向かうために家を出ようとしたところ、

「香。今日入学式なのに忘れてるじゃない」

母上に呼び止められた。

「何をですか？ 母上」

忘れ物はさつき確認したばかりである。

「何をもって決まってるじゃない。学校に登録する武器よ」

「それはプリントに明日からと書いてありましたか……」

「今日からでもできるのよ。お母さんも入学式時には登録したものの。仁も持って行ったわよ。面白い物を持って」

「そうでしたか。では私も持つて行きます。ところで、面白い物とは何ですか？ 仁は確か鍛練の時にナイフをよく使っていた気がするのですが……。時々、気分転換と言つてサバイバルナイフも使っていましたか」

その他に思い当たる物がない。

「まあ、学校に行けば分かるわよ」

教えてくれないところを見ると、仁は本当に特殊な武器を持つて行ったのだろう。

「わかりました。学校で直接確かめてみます。では、私も武器を取つてすぐに学校に向かいます。初日から遅刻は恥ですので」

「はい、いつてらっしゃい」

私は自分の部屋に向かい、母上はリビングに戻っていった。

武器との出会いを思い出して

私は自分の部屋に入り、部屋に飾ってある一本の刀を手にとった。

「今日からあなたを本気で使えます。よろしくお願いしますね。」
神斬」

私と神斬が出会ったのは私がまだ五・六歳の時だった。

物置で何か面白い物はないかと探していた私は、奥の方に置かれていた一本の刀を見つけた。

母上を呼んで聞いてみると、母上が武技高校で使っていた物と教えてくれた。

それからである。私が武技高校に入ろうと思ったのは、長いような短いような月日だった。

「そろそろ行きますか」

私は神斬を持ち学校へ向かった。

あの方は何様ですか？

私は何事も無く学校に着くことができた。

事務所の方に行ってみると、母上の言ったとおり今日からでも武器の登録ができるようだ。

列の最後尾に並ぶと、今登録を終えたらしい仁と会った。

「お、香姉ちゃんおはよう」

「おはよう、仁。今日は起きるの早いのだな」

「今日だけだよ。明日からは遅刻常習犯」

「今までを考えるとそうだな」

仁は中学時代まともに行った日は指で数えられる程である。

しばらく仁と話していると、次で私の番と来たところで、

「ボクに順番を譲りたまえ。庶民たち」

と上から目線的な発言が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9150y/>

私に斬られたいのですか？

2011年11月30日12時46分発行